



# 父親を軽んじる家庭には まず優秀な子は育たない

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

「勉強ばかりしているとバカになる。もつと自然と接しよう」と呼びかけて、キャンパスの緑化などを大胆に進め、生徒たちの学力向上につなげた教育実践家、独協医科大学名誉教授の永井伸一さんのお話を本欄の第43回で紹介させていただきます。

その永井先生がこの度、「男の子のお母さんがやってはいけない10の習慣」(青春出版社)という本を出版され、家庭での教育のあり方について具体的な提案をされましたので、続編として紹介させていただきます。

永井先生は、独協医科大学で脳科学、発達心理学を専門にされていましたが、大学教授から独協中学・高校の校長に転任され、11年間にわたり、自然との触れ合いをベースにした環境教育を実践するとともに、4000組の親子に面接、追跡調査を行い、母と子の関係、父と子の関係が子どもの成長にどのような影響を与えるかを学術的に調べた方です。

「人間は体を動かさないと脳も正常に働かない。遺伝子に組み込まれた体を動かす習慣はいまだに働いている。クラブ活動を奨励するのもこの原理に従っている。筋肉を動かすことによってホルモンの分泌も促され、脳の働きも活発になるのである」というのが先生の持論です。

## 体動かし自然と触れ合う

体を動かすことと自然との触れ合いを



独協中学・高校の屋上で育てられたスイカとゴーヤ。毎年農作だという(永井伸一氏提供)

かねて先生が取り組んだ実践教育の一つが屋上緑化。今夏の異常な暑さで、あわてて窓辺のグリーンカーテンづくりで挑戦した方も多かったのではないかと思います。独協中学・高校で取り組んだのは一種の水耕栽培で、鶏糞を焼いた灰などの肥料を水に溶かして容器に入れ、毛管現象で植物の根が栄養を吸い上げるという栽培方法。屋上などにたくさんの土を運びあげる必要もなく、水が不足気味でも野菜などが良く育つという、先生の開発したシステムです。

独協中学・高等学校の事例では、4階と5階の屋上で、46個の栽培容器を並べてトマトやスイカの栽培に挑戦したところ(写真)、ゴーヤが二本、トマトは2千個、スイカは57個もとれ、近所の住民にも配ったほどだったそうです。

さて、永井先生の実践教育は、このように体を動かして自然に触れ合うことで、

子どもたちは立派に成長するはずなのに、「ダメな子」はいない。でも、「ダメな育て方」はある! (本書の帯より) というように、親の育て方次第で子どもたちの優れた資質が壊されてしまうことが、多くの親子に面談してわかってきた事例が本書では豊富に紹介されています。

子どもが勉強嫌いになってしまう親の特徴として、本書は6つのケースをあげています。①夫婦仲が悪い ②兄弟の比較をする ③子どもに無関心 ④厳しすぎる ⑤過保護 ⑥両親が神経質。それぞれについて、母親、父親の日常的な言動がどのような影響を子どもに与えてしまいか、わかり易く説明されていますが、例えば夫婦仲が悪いケースでは、母親が「お父さんのようになっちゃダメよ」などと、お父さんを否定するような態度をとることは絶対に避けるべきだそうです。「父親を軽んじる家庭に優秀な子どもが育った例はほとんど見かけません」とも先生は言っています。

永井先生は横浜市内にお住みですが、幼稚園のお母さん方にご自分の経験をお話しし、「叱らない育児」「自主性を尊重する育児」といったダメな育て方をしないよう訴え続けています。

財団法人 地球・人間環境フォーラム  
環境省所管の公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。  
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。